

災害時介護の質維持に必要な要素

－ 東日本大震災時の介護の実態調査から－

一般財団法人労災サポートセンター 宮城労災特別介護施設

○ 田中 朋子 熊谷 孝二 阿部 芙季子 工藤 繁子

【はじめに】X施設は労働災害により、脊髄損傷や頭部外傷で重度障害を負った方の介護施設である。東日本大震災の発生により、ライフラインが遮断され、復旧までに25日間要した。その間の介護を振り返り、非常時の介護の質を保つために必要な要素について検討した。

【研究方法】①勤務者への半構造的インタビュー調査②当時の各種記録内容③災害発生から平常に至る過程を立花らによる「介護の質保証モデル」のカテゴリーの中の「生命維持レベルの介護Ⅱ」と「非常時生活レベルの介護Ⅰ」の必要項目と入居者の言動変化について整理考察する。

【結果】ライフラインの復旧状況により、介護内容は刻々と変化した。ライフラインの中で電気復旧が一番早く、震災から3日後の3月14日であった。施設のエネルギー備蓄は充分だったが、電気の復旧が不確かであったため暖房を制限したため低体温、電気毛布によるI度の低温熱傷の発生もあった。入居者は震災直後、指示に対して協力的であったが、10日前後を境に不満や要望など言動に変化が見られた。娯楽である麻雀などを開

始したのもこの時期である。「非常時生活レベルの介護Ⅰ」の介護行為として洗面と口腔ケアが挙げられているが、X施設で通常パターンにもどったのは13日目であった。この時期がX施設における「生命維持レベルの介護Ⅱ」と「非常時生活レベルの介護Ⅰ」の移行期と考える。

【結論】非常時の安全安心に繋がるコミュニケーションは、平常時から個性を把握した関わりで成立する。過剰な節約をしない為にも常に施設内エネルギーの予備能力の把握、施設内備品や災害支援物資などの在庫管理は重要である。非日常を日常に近づけるため他職種連携と協働による工夫が必要である。